

古代ローマ帝国の歯科医学（その1）

Aulus Cornelius Celsus とその De Medicina について*

森 山 徳 長**

I. はしがき——古代ローマの歯科医学文献

古代ローマの歯科医学を語る場合必ず挙げられる名前には、アルガッサス、アスクレピアデス、コルネリウス・ケルズス、プリニウス・ゼクンズ、スクリボニウス・ラルグス、クラウヂウス・ガレヌス、アルキゲネス、エジーナのパウロスらがある。歯科医学史の著者たちが紹介するそれらの人物のうち、誰もが省略することの出来ないのが、ケルズスとガレヌスであろう（図1、2）。

前者は紀元第一世紀前半、後者は第二世紀後半を代表する古代ローマの医学著者である。ローマ帝国は、BC 二世紀、すでにギリシア、中東を含む広大な範囲を有するようになっていた。しかしその歯科医療は医学一般と同様に、ギリシア人医師により主流を占められていた。しかし一方、エトルリアの錬金術の流れをくむ歯科補綴術も、一般に滲透していた証拠がある。奴隷制社会では、手で行う仕事は卑しいものとされ、高度の教育を受けた教養人（医師）の手になるラテン語の文献は、ほとんど残されていない。

古典期文学の黄金時代、すなわち一世紀前半には、ケルズス、続いてプリニウスが医学文献の著作の面で活躍した。これらの膨大な百科全書的な著作は、ローマ時代の医学・歯科医学が、Ambrois

Paréの時代の技術とほとんど同じ水準に達していたことを証明しているといわれている。そのことを示す現代の歯科医史学の著者たち¹⁻¹⁴⁾によるケルズスの業績についての記載を、一括して表1に示す。

Celsus に関する医史学・歯科医史学的研究には、1879年 E.W. Foster¹⁵⁾、1913 および 1925年 Max Wellmann¹⁶⁾、1915年 Friedrich Marx¹⁷⁾、1926年 Garrison¹⁸⁾、1926年および1935年 W.G. Spencer¹⁹⁾ ²⁰⁾などの広範な研究がある。

ラテン語よりの翻訳は、最近のものとして、独語系では1906年 Eduard Scheller²¹⁾、1915年 Friedrich Marx のもの、英語系では 1935年 W.G. Spencer²⁰⁾ の Loeb Classical Library の3巻ものがある。

筆者は De Medicina に含まれる歯科医学的事項について Foster, Guerini, Spencer の研究および翻訳をもとに和訳を試みた。

本篇では、Celsus の人物、De Medicina の書誌学と、その歯科医学関連事項についてのべ、続篇で試訳を披露して大方のご叱正を得たいと思う。

II. ケルズスの人物像

1) 生・没年について

表1に示したように、各著者によりまちまちに記載がおこなわれている。正確な記録はなく、同時代作家による作品の断片により類推する以外に方法はない。

この点については、Foster の論評がその輪廓をかなり明らかにしているので、以下に引用する²²⁾。

『ケルズスはアウグスト帝の治世中か、その直前に生れた。Freund は、ラテン文学の分類で、古

* Dentistry of Ancient Roman Empire (Part 1)
Aulus Cornelius Celsus-Encyclopedist, and
his "DeMedicina."

** Moriyama, Norinaga: Tokyo Dental College
東京歯科大学

本論文要旨は第114回日本歯科医史学会例会
(1980.2.15 東京モリタ・ホール) で口演した。

表 1 ケルズスに関する歯科医学史および医学史の教科書の記載

著 者	項 目	記載の 頁 数	ケルズスの人物	生・没年	『医 術』
川 上 1949		$\frac{1}{2}$	アウルス コルネリウス ケルズス	B. C. 30 ～A. D. 50年頃	ラテン語医書の最初の執筆者
本 間 1971		1	古代ローマの碩学	B. C. 30 ～A. D. 50年頃	歯学に関する著述も少ない
青 島 1973		$\frac{1}{2}$	ケルズスはローマかベロナ（北イタリア）のいずれかに生れ、博学で歯科、農学、修辞学、戦術に長じていた。	B. C. 30	B. C. 30年頃百科全書派を代表するツェルズスや、アイウルス、コルネリウス、ケルズスが生れ医歯学の発展に貢献した。
正 木 1975		大 $\frac{1}{2}$	実際に医術を行ったかどうかは確かでなくギリシアの手書の本を翻訳しそれを編集した人ではないかといわれている。	B. C. 30 ～A. D. 50	A. D. 30年に書かれたとされ百科全書の一部として編集されたらしい。
Guerini 1909		9 $\frac{1}{2}$	人物については不明な点が多く、ローマかベロナの生れか定かでない。職業的医師という歴史家もいるが医術を行ったことはないという人もいてどちらも不確か。Galenがいう philiatri の一人であった。	正確な生・没年不詳	農業、修辞学、兵法や医学について書いた。医学のみが残っている。
Taylor 1922		$\frac{1}{4}$			
Bremner 1939		2	有名な医学作家医師としての経験によってか、単にギリシアの医書の翻訳・編集者か不明	25 B. C. ～ 50 A. D.	ヒポクラテスの説に忠実で、歯科疾患の記載は広範囲にわたっている。
Prinz 1945		$\frac{1}{3}$	ローマ貴族で、医術の経験を持った素人の医学著作家	約 B. C. 25 ～ A. D. 35	医術 8 巻が残っている。最初にフィレンツェで1478年に印刷された医学書で多くの版を重ねたことは他の追従を許さない。
Lufkin 1948		5	第1世紀初期に開花したローマの貴族で著作家		“De Medicina, Libri octo”
Weinberger 1948		2	ローマ帝国初期の偉大な作家	B. C. 25 ～A. D. 50	主としてギリシア語から古代の医学、外科学を集大成した。De medicinaから歯科に関する記述を発見出来る。
Garrison 1929		2	多分医者ではなくカトーやヴァローのように百科辞典の翻訳や編集を行った貴族の一人であった。	チベリウス帝の時代を生きた。	Pliny によって医者より文人の一人とされ、Quintilian により mediocre と軽く見られた。中世には彼の名は4回しか出てこないが、ルネッサンス後印刷された最初の医書となった。彼のラテン語の純粹さと正確さは医学のキケロと呼ばれるほどであった。
Margotta (訳) 1972		2	ローマ帝国の最も有名な医学著作家		1443年に後にローマ教皇ニコラウス5世となったトマス・パレントウチエリが10世紀に書かれたその古写本をミラノの聖アンブロシウス大教会堂で発見。
Lyons & Petrucelli 1978		大1頁	百科辞典作者。医者ではないローマ貴族で、農業、法律、軍事、科学、哲学、修辞学、医学の知識を総合しようとした人。	fl. 14～37 (チベリウス帝)	教皇ニコラスにより発見され、その後グーテンベルクの発明により印刷された最初の医書

Table. 1 Description on Celsus by the Dental & Medical Historians.

その歯科医学関連の記述
ヒポクラテスの流れをくんでいる。歯痛療法や歯齦疾患の療法なども詳細にのべてある。口腔衛生、抜歯法、下顎骨折、脱臼の療法も記載した。
歯痛に対する薬物の使用法を詳述。これらが歯根膜炎の療法であることを強調。その他アフタや口腔潰瘍、歯肉疾患や骨折についての記載もある。
ソエルズはその医書の中に歯や口腔の疾病特にエプーリスやアフタにつき記載し、一方ケルズスの著書を見ると口腔衛生、歯痛療法、歯周疾患、外科らが精細に解説されている。外科では顔面や口腔の整形手術、鼻腔息肉、甲状腺摘出などの高度の手術が記載されている。
1, 2, 5, 6, 7 巻にそれぞれ歯科に関連の事項が解説されている（口腔衛生、小児の口腔潰瘍と生歯困難、歯痛に対する麻薬の応用、歯痛の療法、口腔軟組織疾患の療法、歯齦痛の療法、抜歯の仕方、顎骨折の療法、下顎脱臼の整復など。
巻1（衛生・朝洗口すると良い）、巻2（小児のアフタ）、巻5（歯痛に対する睡眠薬）、巻6（歯痛の療法、口腔軟組織疾患、潰瘍、アフタ、パルーリス他）、巻7（抜歯法）、巻8（下顎骨骨折と脱臼）の処置について詳細に且つ原文をパラフレーズして記載している。
歯痛患者に催眠薬を処方した。それには acorns, カストレアム, シナモン, ケシ, マンダラゲ, こしょうを含む。大きなウ窩があり抜歯する時は、リントか鉛をつめて破折不ようにする。歯牙を保存するため又は歯痛をやわらげるため充填を行ったかは明らかではない。
歯痛、膿瘍、歯齦痛、顎骨折等の処理法、処方について略記、抜歯の方法や適応症についてのべた。また晩存乳歯の抜歯と永久歯を手指で正しい位置に戻す方法を述べている。
最初の4巻は衛生と食餌による治療をのべている。次にアフタの療法にみょうばんや硫酸銅を用いた事。パルーリスは切開し、抜歯し、腐骨があれば除去する。残根の抜歯にリザーグラを用いる。歯牙の破折はリントをつめて防ぐなどを記載している。
以下の12の項目につきくわしくのべている。1. 生歯困難の症状、2. ギリシア人がアフタと呼んだ潰瘍とその療法、3. 歯痛の諸療法、4. パルーリス、5. 歯齦炎・歯牙の弛緩、6. 歯槽膿瘍の処置、7. 抜歯法、8. 歯牙沈着物、9. 打撲による歯の動揺の処置法、10. 乳歯の晩存、11. 顎骨折、12. 下顎脱臼の処置法
生歯困難、歯痛、抜歯に対する考え、方法、歯牙の動揺の療法、口腔軟組織疾患、切開法、ファイルの用法、乳歯脱落前の永久歯の萌出の場合の処置（矯正法の記載の最初のもの）顎骨折の処置法等について述べている。
8巻のらち最初の4巻は食餌や養生法による治療を記述し、あとの4巻は薬や外科を記録した。第3巻には狂気と心臓病について始めて記載。第4巻には炎症の4徴候、第5巻は薬物の分類、度量衡、薬治療法につき現代の治療辞典的記載を行い、始めて滋養灌腸を記載した。6巻は眼、耳、鼻、口腔、咽喉の外、皮膚と性病について記載。
学理上の論争をさけて事物を系統的に配列した。彼は病気を原因によって分類せずに、食物、薬、外科手術などの治療法によって分類した。医学の完全な教本を作ろうとした最初の試みである。
ルネッサンス後までなおざりにされた理由の一つは、その当時の科学書、医学書はギリシア語で書かれたのでラテン語の書物はかえりみられなかった。



Fig 1. Portait of A.C. Celsus in Weinberger's History of Dentistry. (Lit. 10) p. 134

図1 アウルス・コルネリウス・ケルズスの肖像 (Weinberger, Schellerの著書の挿絵)

典期黄金時代に、キケロ、シーザー、タキトス、スエトニウス、プリニーなどとともに、ケルズスを加えている。Facciolatusの辞書によれば、ケルズスは次の銀の時代の筆頭に来るのを見出すが、彼はその前の黄金時代に生れ育ち、開花し、その著作は、文章の平易さ、優雅さ、学識によって、疑いもなくその時代最善の地位を与えられねばならぬといっている。

Fabriciusおよび最近の Le Clere が、その『医学の歴史』で、ケルズスはアウグスト帝治世の末期、または最もおそくともティベリウス帝初期に著作活動をしたとしている。同年代の作家によると、彼はアウグスト帝の死後も生きて活動した様子であるが、そんなに長い期間ではない。それはその時代の若い作家 Columella が、その『農業』の中でケルズスにつき言及しており、その時すでにケルズスは死んでいた、という論及でわかる。私はそれ故以上の事から、ケルズスの死を A. D.

* ケルズス——ローマ、約紀元38年頃没



Fig. 2. A.C. Celsus (Lyons & Petrucelli Medicine-An Illustrated History. P. 245) Detail from a print dated 1765. National Library of Medicine, Bethesda.

図2 ケルズスの肖像. LyonsとPetrucelliの著書より引用. 1765年版の書物からとっている。

38年または40年以後とすることは出来ない。』

すなわち彼はその論文題に “Celsus. Roma. Ob. circ. A.D. 38”^{*} としている程である。

いずれにせよ、その著作活動を行ったのはティベリウス帝 (14~37 A.D.) 在位中であつたことはたしかである。

誕生地も、ローマともコモともいわれるが、Spencer によれば、最近の研究では Ovid 後期の詩に親しみ、おそらくは Narbonensis に住んでいたであろうといわれているという²³⁾。

また彼の呼び名 (first name) について Aurelius とする学者がある。しかし Aurelius は、姓にかぶせる名ではないので誤りであり、Aulus が正しい。

2) Celsus が医師であつたか否かの論議

一部の史家は、実際に臨床にたずさわった敏腕の医師であつたとする。しかし、通説では医術を開業した医師ではなく、医学的知識を百科全書的に書きまとめる役目をした、富裕な貴族階級の人であつたとされている (表1)。

当時のローマ社会では、医者と素人の区別が明瞭でなく、また奴隷階級の職業医師が、特定の疾病の治療または手術のみを行うことが通例であったし、名ある高い社会的地位を持つ医師は、たいいてはギリシア人であった。ほとんど同時代の医学作家 Scribonius Largus などは『全ての疾病を治すことの出来るものでなければ医師とは呼べない²⁴⁾』といているくらいである。

Spencer はいろいろの理由を挙げて、ケルズスは臨床医家ではないという説を、一応とっている。しかしまた原典の翻訳を通じて、以下の様に、ケルズスが医師であるとする議論の根拠をのべている。すなわち、『たとえ、専門家と素人の区別が明瞭でなかった、当時の社会の状況を前提としても、ケルズスが日常患者に接し、臨床医家としての権威を以って“医術8巻”を著したとする根拠は、その著作の章句中から見る事が出来る。すなわち、

1) 多くの箇所、処置法や症状についての彼の意見を、動詞の第一人称単・複数でのべており他の所では“ego”という強調語を使っている。

2) 彼が個人的に知っている患者を、夜半までも看とったことを記述している。精神病者の治療にも、そうした個人的診療看護を行ったことがうかがえる。

3) 同時代のみならず、古いギリシアの権威者の指導的医学書によく通じていた。』とのべている²⁵⁾。

Wellmann は、Spencer と同じような論旨を先ず述べてから、Celsus 自身から Pullius Natalis に宛てた手紙の形で、彼自身がギリシア語の処方集を翻訳したことを述べているので、この古代の文書(手紙)が、全ての問題を解決する鍵となっているという²⁶⁾。またギリシア語原典について詳細に考証し、ケルズスが翻訳家であることを証明している。

Foster, Wellmann や Spencer の研究によると、Celsus より少し若いラテン作家 Columella, また同年代の Quintilian は、彼に対し“mediocri vir ingenio”(a man of mediocre talent)と綽名したという。

その後の Pliny や Galen も彼を *medici*(医師)とは呼ばず *auctore*(作家)と呼んでいる。

筆者の考察するところでは、貴族コルネリ家の家長としてのケルズスは、一族や奴隷たちの病気や外傷の処置にたずさわる場面にもしばしば出会ったことであり、そうした経験と、農業、兵法、修辞学、哲学、法律などの百科辞典編集者としての文才が、医術8巻をも書かしたもので、職業的医師ではなかったとする諸家の説に賛成したい。

3) De Medicina の医学上の系譜

第1巻緒言は古代から当時までの完全な医学史である。そこにも記されていることから、全巻を通じてヒポクラテスの“医学全集”が、原資料となっていたことは間違いない。“緒言”で、その後の Asclepiades, Meges, Themison, Heraclides らの系譜をたどって、ケルズス自身は、Dogmatic School(独断学派)と Empiric School(経験派)の、中間の立場をとることを表明している。

III. De Medicina の書誌学

ケルズスは、大凡ティベリウス帝の治世に、(14~37 A.D.), 農業、医学、兵法、法律、修辞学、哲学の6つの分野の百科辞典を著したことが、同時代のラテン作家 Quintilian らの記述により証明されている。そのうち農業に次いで第2番目に位置するのが医学8巻であって『学術書(De artibus)』と称せられるこの全書のうち『医学(De medicina)』8巻のみが、完全な形で現在に伝っている。

中世においては、Garrison によれば、Celsus の名は4回しか出て来ないという。

また Margotta によれば、これがいつ書かれたものかもほとんどわからず、忘れられていたが、すぐれた学者グアリーネ・ディ・ヴェロナが、1426年になってこれの存在に気づき、1443年にはのちに教皇ニコラウス5世になった、トマソ・パレントゥチェルリが、ミラノの聖アンブロシウス大教会堂で、10世紀に書かれたその古写本を見つけたのである。

Garrison の引用する Max Wellmann の意見は、ケルズスの古写本の、多くの平行記事の比較研究

によると、この著作は、ヒポクラテスやアスクレピアデス、またヘラクリデスなどの著作の編集すなわち翻訳である。そして、その資料は、ティベリウス帝の侍医であったティベリウス・クラウディウス・メネクラテスにより、A.D. 20年より以前に書かれたギリシア語の一般向の医学事典、処方集であった、と推量されている。

Wellmann は1913年の発表では、Cassius Felix の翻訳であるとしたが、その後1925年の研究で、いずれもティベリウス帝の侍医であった Cassius, Eudemus, Menecrates の3人のうち、Menecrates の書いたものが正しいとした。

現存する De Medicina の主な写本は F.V.P.J の4本であってそれぞれ9, 10, 15世紀のものである。

1) F.—Codex Florent, ラウレンティアン図書館, 37, 1. 9世紀(一部欠損している)

2) V.—Codex Romanus, バチカン図書館, 5951. 9世紀(一部欠損)

3) P.—Codex Parisinus, フランス国立図書館, 7928. 10世紀(V写本からの写本で、欠損がより少ない)

4) J.—Codex Florent, ラウレンティアン図書館, 73, 7. 15世紀(ニコラオ・ニコリによって非常に古い写本から写されたもので、今はもはや失われている)

さらに Wellmann によると、現存する105種の版のうち、最も興味あるのはフローレンス初版(1478年)、1481年のミラノ版、1524年のベニス版(最も稀少版で高価)、1525年のアルダイン版、美しい1657年の Elzevir 版であるという。また手近な近代版は Daremberg の Teubner 版 (Leipzig 1859) と、Alexander Lee (1831) と A. Védérès (1876) の対訳であり、これには Paul Broca (1865) の明解で学問的序文がついている。権威ある現代版には、Friedrich Marx の Teubner 版 (1915) がある。そのほかに英語系のものとしては、正木は1756年 James Greive の英訳版を挙げ、また Lufkin と Weinberger は、W.G. Spencer の Loeb Classical Library 版 (1935~8) を挙げている。

歯科医学畑の Celsus 研究は、1879年 E.W. Foster により、Dental Cosmos 誌に3月間連載された広範な研究がある。歯科医史学の教科書では、Guerini の Celsus に関する記載が最も広範で、かつ歯科医学的事項を、あますところなく解説している。以降の著者は、大凡 Guerini に準拠し、略述している。

IV. De Medicinaで取扱われる歯科医学 関連事項

『医術』1~4巻は食餌と養生法による健康法を述べ、後半5~8巻は、薬物治療と外科療法を取扱っている。

3巻には、はじめて精神病と心臓病の記載がされ、4巻には炎症の4徴候について述べてある。5巻は今日の治療ハンドブックの様な形式で、薬物の分類・度量衡・処方集を記載した。6巻は皮膚・性病の記述と、眼・耳鼻・咽喉・口腔の疾患の主として薬治療法を述べている。7巻は、頭部に始り身体各部の外科処置法を述べ、8巻には解剖学の系統的記載と、骨折・脱臼治療がのべられている。

Foster によれば、Celsus が歯科医学に関連して記載した内容は、2巻1章(Ⅱ-1) 6巻9, 12, 13, 15章, 7巻5, 12章, 8巻1, 7, 12章であるとする。

Guerini はⅠ, Ⅱ巻(章を明示せず)、Ⅴ-25, Ⅵ-9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, Ⅶ-12, Ⅷ-1, 7, 12の歯科疾患に関連する記載を、部分又は全訳し解説している。すなわち Foster のいうⅦ-5を除き、Celsus の歯科医学を網羅している。

表1にある諸家は、いずれもそれにもとずいて簡略に述べている。

以下に、巻を追ってその歯科医学関連の記事をとりあげ、箇条書的にその項目を挙げれば

- 1) 巻Ⅰ・2章 口腔衛生のための洗口
- 2) 巻Ⅱ・1章 異なる季節に(年齢により)特有の疾患について
- 3) 巻Ⅴ・25章 歯痛患者に対する睡眠薬処方
- 4) 巻Ⅵ・9章 歯痛の療法
- 5) 巻Ⅶ・11章 口腔の潰瘍の療法

- 6) 卷Ⅶ・12章 舌の潰瘍の療法
- 7) 卷Ⅶ・12章 歯齦の潰瘍の療法
- 8) 卷Ⅶ・13章 歯齦の瘻疽の療法
- 9) 卷Ⅶ・5章 体外へ武器を取出す法
- 10) 卷Ⅶ・12章 歯について(歯槽膿漏治療および抜歯法)
- 11) 卷Ⅷ・1章 顎骨と歯牙の解剖学的記載
- 12) 卷Ⅷ・7章 下顎骨骨折
- 13) 卷Ⅷ・12章 下顎骨脱臼

V. む す び

古代ローマ帝国の医学・歯科医学は、ギリシア人によって、その主導権を握られていた。帝政が確立された時代になって、はじめてラテン語で書かれた医書であるという意味で、Celsus の *De Medicina* のもつ意義は大きい。

Celsus の人物については、不明なことが多い。しかし、結論的にいえば、彼は開業医家ではなく富裕な貴族の一員で文才に恵まれ、百科辞典編者として、医学に関しては、ギリシア語で書かれた医学書・処方集等をラテン語に翻訳・編集して *De Medicina* 8巻を著したことは、種々な証拠により明らかである。

De Medicina は、印刷術が発明されたごく初期に印刷された医書の一つであるが、紀元第一世紀前半のローマで行われていた医学の、理論と実際を現在に伝える貴重な文献である。ラテン語の原文、後世の英・独語の翻訳・解説の文献を書誌学的に整理し、また歯科医学関連事項を抽出し紹介した。続篇でその日本語訳を紹介する予定である。

参照文献

- 1) 川上為次郎：歯科学史提要，国際出版社，東京，1949. p. 12.
- 2) 本間邦則：歯学史概説，医歯薬出版 K. K. 東京，1971, pp. 13~96.
- 3) 青島 攻：歯科のあゆみ，ABC企画，東京，1973, pp. 94~96.
- 4) 正木 正：歯科医学概論，医歯薬出版 K. K. 東京，1975, p. 60.
- 5) Guerini, Vincenzo: A History of Dentistry

- Lea & Febiger, Philadelphia 1909—Reprinted Longwood Pres Inc. Boston 1977, pp. 80~89.
- 6) Taylor, J.A.: History of Dentistry, Lea & Febiger, Philadelphia 1922, p. 30.
- 7) Bremner, M.D.K.: The Story of Dentistry Dental Items of Interest Pub. Co. New York (1939), 3rd Ed. 1954, pp. 52~53.
- 8) Prinz, Hermann: Dental Chronology, Lea & Febiger, Philadelphia 1945, p. 24.
- 9) Lufkin, A.W.: A History of Dentistry, 2nd Ed. Lea & Febiger, Philadelphia, 1948, pp. 60~66.
- 10) Weinberger, Bernhardt Wolf: An Introduction to the History of Dentistry, C.V. Mosby Co. St. Louis, 1948, Vol. I, pp. 133~5.
- 11) Garrison, Fielding H.: An Introduction to the History of Medicine (1913), W.B. Saunders, Philadelphia, 4th Ed. 1929, pp. 107~109.
- 12) Margotta, Robert (*Medicina nei secoli*), 岩本 淳訳：図説医学の歴史，講談社，東京，1972, pp. 85~87.
- 13) Lyons, A.S. & Petrucelli, R.J.: *Medicine—An Illustrated History*, Harry N. Abrams, Inc, New York, 1978, pp. 239~48.
- 14) 小川政修：西洋医学史，日新書院，東京，1944，復刻版，金原書店。
- 15) Foster, E.W.: CELSUS. Roma. Ob. circ. A.D. 38, *Dental Cosmos* 21: 184~192, 235~241, 297~304 (Apr., May, June), 1879.
- 16) Wellmann, Max: A. Cornelius Celsus. Arch. f. Gesch. d. Med. Leipzig, 16: 209~213, 1925.
- 17) Marx, Friedericus: A Corneli Celsi quae supersunt (*Corpus medicale*, Vol. I), Teubner, Leipzig, 1915.
- 18) Garrison, F.H.: New Views of Max Wellmann on the authorship of Celsus, *Annals of Medical History* 8: 203~207 (Editorials), 1926.
- 19) Spencer, W.G.: Celsus' *De Medicina*—A Learned and Experienced Practitioner upon What the Art of Medicine could then Accomplish, *Royal Soc. Med.* 19: 129, 1926.
- 20) Spencer, W.G.: Celsus-*De Medicina*, with an English Translation in 3 volumes. William Heinemann, London, 1935 (3rd reprint 1960).
- 21) Scheller, Eduard: Aulus Cornelius Celsus Über die Arzneiwissenschaft in acht Büchern

- | | |
|---|---|
| übersetzt und erklärt von E. Scheller, 2. Aufl.
1906. | Largus., Bull. Hist. Dent. 26: 21~27, p. 22.
1978. |
| 22) Foster: 15) op. cit. pp. 185~7. | 25) Spencer: 20) op. cit. Vol. I, xi~xii. |
| 23) Spencer: 20) op. cit. Vol. I, vii. | 26) Wellmann: op. cit. in 18) Garrison pp. 204~
205. |
| 24) Thomas, L.R.: The Dental Aspects of the
Compositiones Medicamentorum of Scribonius | 27) Spencer: 20) op. cit. Vol. I. p. ix. |

DENTISTRY OF ANCIENT ROMAN ENPIRE (Part 1)

Aulus Cornelius Celsus—Encyclopedist, and his “De Medicina.”

Norinaga Moriyama, D.D.S., D.Med.Sc., F.I.C.D.

In the ancient Roman society, the Greeks had their leadership in the field of medicine and dentistry. *De Medicina*, compiled by Aulus Cornelius Celsus as the second book of a voluminous encyclopedia, had its significance as the first medical book ever written in the Latin language.

Though we have to confront with many myths concerning the character of Celsus, it is reasonably inferred by various proofs, that he was not a practitioner of medicine, and that he had literary talent and also, as head of a rich noble family, had experiences of exerting medical care for his family and slaves. He had also translated various Greek medical books and prescriptions, which were compiled in eight books of medicine.

De Medicina had such a great important value from the historical viewpoint that it became one of the first printed books ever printed in Florence immediately after the invention of modern printing.

The present author investigated the original in Latin, later English and German translations, and the works on Celsus and *De Medicina* by various authors. The bibliographical approach to the motive and scope of *De Medicina*, which reflected the status of medical, and especially dental care in the first century A.D. is described in detail in this report.

The Japanese translations of dentistry in *De Medicina* will be published in the nearest future in part 2 of this report.